

令和元年6月14日現在

機関番号：32511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K04572

研究課題名(和文) 幼児期のコミュニケーション能力発達評価法の作成と実用化に向けた研究

研究課題名(英文) Development and practical use of the Communication Skills Tests for preschool children

研究代表者

瀬戸 淳子 (SETO, Junko)

帝京平成大学・健康メディカル学部・教授

研究者番号：70438985

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、幼児期のコミュニケーション能力を捉えるために報告者らが作成した課題の有効性を検討するために、4～6歳児の調査資料を分析した。各課題において、コミュニケーションスキルの発達評価に有効と思われる指標を抽出し、各スキルの発達の様相を示した。コミュニケーション能力は特に5歳後半から6歳台にかけて急速に発達する傾向が示された。この研究で評価されたスキルは、語彙などの言語の基礎能力とは別の能力であることが示され、作成した課題はコミュニケーションに問題を抱える子どもの発達評価法として一定の有効性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コミュニケーションの問題を早期に特定することは、コミュニケーションに障害のある子どもの支援にとって重要である。しかし、現在、幼児期のコミュニケーション能力の発達のプロセスや評価の方法論については、十分に研究が進んでいない。本研究は、既存の言語検査で評価される語彙や統語能力などとは異なる、質問に対する応答やナラティブなど、幼児期後期に発達するコミュニケーション能力の発達の様相とそれを評価する方法論を示した点で、学術的意義、社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：We examined the validity of the tasks for assessing communication skills in preschool children. A survey of typically developing children (4-6 years of age) was conducted, and data were analyzed. As a result, valid indicators of tasks assessing the development of communication skills were extracted, and children's skills were scored to clarify the developmental aspects of each skill. Results indicated that communication skills showed a tendency to develop rapidly, especially from the age of 5 to 6 years. The language skills assessed in this study were different from skills such as verbal knowledge. The tasks developed in this study were effective in assessing the development of children with communication problems.

研究分野：臨床発達心理学、言語コミュニケーション障害学

キーワード：コミュニケーション能力 幼児期 発達評価 ナラティブスキル 質問応答スキル 言語知識との関係

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

保育者を対象に実施した実態調査によると、特別な支援が必要な幼児の約4分の1は、言葉の問題を抱えていることが示された(秦野・瀬戸ら 2009)。そして保育者が気になる言葉の問題は、語彙や統語レベルの問題というより、談話レベルでのコミュニケーション能力の問題がより大きいことが示唆された。このようなコミュニケーションの問題を早期に特定できれば、生活や遊びを中心とした保育や教育が行われる幼児期に適切な対応をしていくことで、発達も変化することも期待される。しかし、幼児期のコミュニケーション能力の発達の機序やプロセス、評価の方法論については、十分に研究が進んでおらず、保育教育者の相談ニーズはあっても、具体的な支援に結びついていないのが現状である。

この現状を踏まえ、瀬戸・秦野(2015)は、第1に、保育教育者記入用の「保育場面における言語・コミュニケーションアセスメントシート」を作成した。第2に、現在有効な評価法がない幼児期のコミュニケーション能力の評価指標の作成に向けて、質問に対する応答やナラティブなどを評価する課題を新たに作成して基礎調査を行なった。しかし、後者については、調査対象者数が限られていたため、課題の妥当性を検討するために人数を増やした拡大調査を実施し、どのような基準で分析をすればコミュニケーション能力の発達が捉えられるか、適切な評価指標の抽出の検討が残された。また、課題相互間の関係性の分析や、既存の言語検査を実施し、語彙などの言語的知識の発達水準との関連性を分析する必要性も残された。

2. 研究の目的

本研究では、コミュニケーションに障害のある子どもの支援に活用するために、幼児期後期から学童期にかけて発達するコミュニケーション能力の発達評価法を作成することを目的とする。

- (1) 幼児期のコミュニケーション能力の評価のために作成した課題をもとに調査を実施し、発話内容の分析から、各コミュニケーションスキルの発達評価に有効な分析視点や指標を抽出し、コミュニケーションスキルの発達プロセスを明らかにする。
- (2) 抽出された発達評価指標をもとに、コミュニケーションスキル間の関係性、および各コミュニケーションスキルと既存の言語検査で測定された語彙等の言語の基礎能力との関連性を検討する。また、コミュニケーション能力発達評価法としての有効性を検討する。

3. 研究の方法

(1) 研究の対象、手続き、分析資料

幼児期のコミュニケーション能力の評価に向けて、瀬戸・秦野(2015)が作成した7種類のコミュニケーション能力評価課題をもとに、調査を実施した。対象者は、保護者の研究協力の承諾が得られた、幼稚園年少・年中・年長児153名(4歳前半22名、4歳後半35名、5歳前半33名、5歳後半29名、6歳前半18名、6歳後半16名)である。そのうち後述の言語検査を実施したのは70名である。その他、小学生1、2年生50名についても調査を実施したが、分析継続中である。

手続きは、1日目に言語検査(PVT-R 絵画語い発達検査、行動調整機能の発達テスト(天野2006)、KABC-IIの語彙尺度課題(表現語彙、なぞなぞ、理解語彙))を実施した。2日目に、作成した7つのコミュニケーション能力を評価するための課題を実施した。1日目、2日目ともに対面式で個別に調査を実施した。すべての発話のトランスクリプトと言語検査結果を分析の対象とした。

(2) コミュニケーション能力の発達を評価するための7つの課題内容

「なにしてあそんでる」課題：質問応答状況の中で、幼稚園や家での遊びや楽しかったことについての日常経験を語る。

「どれがいい」課題：出版社の許可を得て、絵本新版『ねえどれがいい?』(ジョン・バーニンガム作 まつかわ まゆみ訳 評論社 2010)の場面を課題とし、質問に対して当該対象を選択した理由を説明する。

「まねしてみよう」課題：知能検査等を参考に語の一部を改変した4~8文節の課題文を復唱する。

「どんなじゅんばん」課題：日常よく経験している場面について、絵カードで示された最初と最後のでき事の間に入るでき事を時系列に説明する。

「どうやってあそぶ」課題：ルールのある集団遊びについて、遊び方を説明する。

「どんなえかな」課題：絵に描かれた状況を読み取り説明する。

「どんなおはなし」課題：出版社と著者の許可を得て作成した字のない紙芝居「クレヨンのはしご」(板橋敦子著 ひさかたチャイルド発行)の話をCDで聞かせた後に、視覚的手がかりが無い状態で物語の内容を語る。

4. 研究成果

(1) コミュニケーションスキルの発達のプロセス 明らかになった主な成果を以下に示す。

質問応答状況における語りの発達(「なにしてあそんでる」課題):

園や家での遊びについての語りは、一定の基準で単位(ユニット)に分割し、ユニット数や発話内容、ユニット内での構造の複雑さを分析した。発話量は4歳後半から5歳後半にかけて増加し、ユニット内の内容と構造は5歳から6歳にかけて複雑化することが示された。

また、楽しかったできごとに関する自分の経験の語りでは、語りの構造を捉えるために、1エピソード内で語られる「いつ、どこ、だれ、なに、どうした」の要素数の出現率を算出した(図1)。非日常的なできごとを語るが増えるにつれ、時期や場所についての説明が増える傾向が示された。また、語られた要素数の推移を四分位数でみたところ、個人差は大きい、5歳から6歳にかけて中央値が上昇する様子が示された。

このように、質問応答状況において、4歳後半から発話数が増加し5歳以降、発話内の自立語数、要素数が増え、語りが複雑になる傾向が示された。

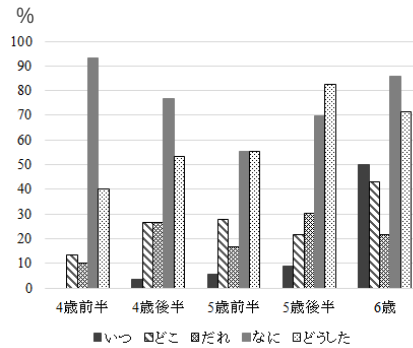


図1 語られた要素の出現率

選択理由の説明の発達(「どれがいい」課題):

選択理由の説明については、当該肢の選択理由をどの程度明確に説明しているかを基準に、0点(理由を説明できない、選択理由として不適切な説明)~3点(当該肢を選択した理由を明確に説明している)に得点化された(図2)。5歳後半までは、選択理由が不明確な発話(0,1点)が約半数を占めるが、6歳台では、具体的な理由を挙げ、より明確に選択理由を説明する発話(2,3点)が70%以上を占める様子がみられた。

また、各個人の選択理由の説明を得点化し、四分位数で総合点の発達推移をみたところ、5歳後半から6歳前半にかけて中央値が大きく上昇する傾向が示された。

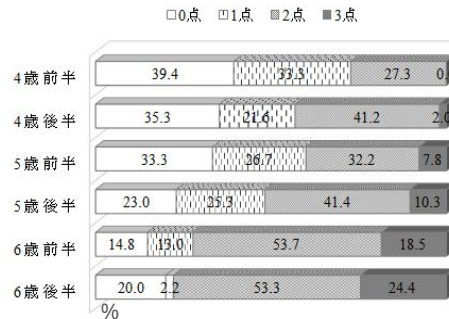


図2 選択理由の説明の得点分布

文復唱能力の発達(「まねしてみよう」課題):

文復唱については、復唱された「文節数」と、誤りなく文全体が復唱された「課題文数」の2つで、各個人の文復唱能力が得点化された。復唱課題には中止基準を設けていたため、復唱された「文節数」については、分析対象人数が限られており再検討が必要であるが、他に比較し4歳前半から4歳後半と、5歳後半から6歳前半にかけて、平均値の上昇が大きくなる様子が示された。一方、誤りなく文全体が復唱された「課題文数」の発達推移を四分位数でみたところ、個人差は大きい、5歳後半から6歳にかけて中央値が上昇する傾向がみられた。以上のことから、文復唱能力は、まず部分的な復唱能力が4歳前半から後半にかけて高まり、徐々に5歳以降の文全体の復唱能力につながっていくことが推測された。

スクリプト知識の発達(「どんなじゅんばん」課題):

課題とした3つの場面で順序性を持って語られ、子どもに共通して注目されやすい事象として14事象が抽出された。評価指標として、語られた事象数をスクリプト知識(SCR)得点として算出した。スクリプト知識の獲得は、場面によってやや異なるが、3つの課題全体のSCR得点の発達推移を四分位数でみると、4歳後半から5歳前半、5歳後半から6歳前半にかけて中央値が上昇し6歳台では散らばりが減少し収束する様子が示された(図3)。

また、補助図版を用いた4事象の順序性の把握率は4歳前半では34%であったが、徐々に上昇し、6歳台では80%前後となった。

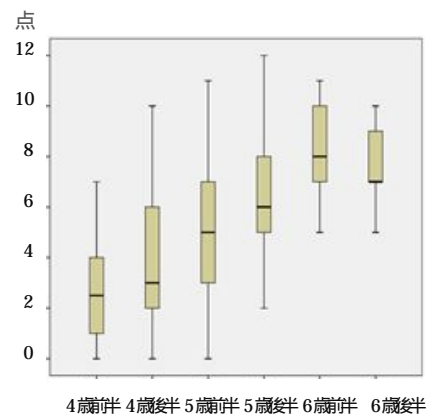


図3 スクリプト知識得点の推移

事象知識の発達（「どうやってあそぶ」課題）：

遊びのルールについての事象知識の語りは、大きく開始ルール、骨格ルール、終了ルール、周辺ルールに分類された。4歳台、5歳前半では、一番焦点化されやすいルールが語られるだけであったが、5歳後半以降、遊びの設定に関わる部分や終了までを見通しての全体ルールの語りへと変化する様子が示された。語られた事象数を得点化し、発達の推移をみると5歳前半以降6歳にかけて急上昇する傾向が示された。ただ、課題差もみられ、一部の課題は、子どもの経験に差があるものがみられたため、評価課題の選定の際に検討が必要と考えられた。

状況絵の語りの発達（「どんなえかな」課題）：

語られた情報の意味統合から、語りは、水準1：断片的な語り、水準2：事象の部分的関連の語り、水準3：一貫性をもつ文脈統合の語りの3水準に分けられた。課題差、年齢差はみられたが、水準得点平均値をみると、6歳前半から6歳後半にかけて、水準3への向上と収束が認められた。

状況絵についての語りの分析視点としてはいくつか抽出されたが、評価指標としては、状況絵に含まれる基準命題となるFN（フィクショナルナラティブ）を抽出して、組織化の要素がどの程度語られるかを得点化するのが有効と考えられた。継続分析中であるが、状況絵の語りの結果から、5歳後半から6歳にかけてFN得点が急増する様子が示された（図4）。

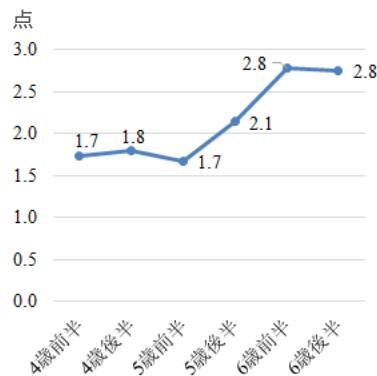


図4 FN得点の推移

ストーリーナラティブの発達（「どんなおはなし」課題）：

語られた発話内容の構造分析を行うために、物語の筋立てに必要な21の基本述語文を抽出し、語られた基本述語文数の出現数を、ストーリーナラティブ（SN）得点として算出した。その結果、ストーリーナラティブ（SN）得点は5歳前半から6歳前半にかけて、急増することが示された（図5）。また、語られた登場人物数も指標として抽出したが、SN得点と登場人物数は、高い偏相関があることが示された。

その他、場面を「設定」「展開」「結末」に分けると、3場面とも語る割合は5歳前半では40%、後半では74%と飛躍的に増加し、物語全体への意識化が高まる様子が窺われた。

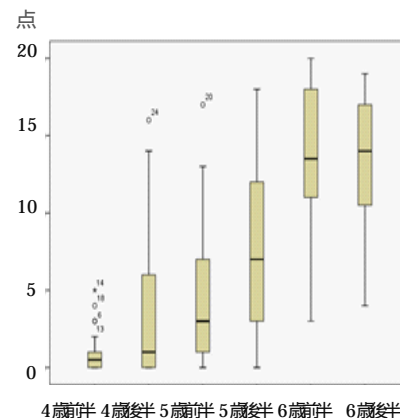


図5 SN得点の推移

以上のように、4歳台から5歳前半までは、各スキルの発達の様相はそれぞれ異なるが、多くのスキルが5歳後半から6歳台にかけて急速に高まり、コミュニケーション能力が一気に発達していく様子が示された。

(2) 課題間の関係性についての分析

コミュニケーションスキル間の関係性

コミュニケーション能力の発達を評価するために作成した各課題の得点間の相関について検討した。ほとんどの課題の得点間、および課題の得点と年齢の間に、弱～中程度の相関がみられた。年齢を統制した偏相関係数を算出した結果、暦年齢の影響を取り除いても、課題の質問状況における語りと、課題の選択理由の説明の間には中程度の偏相関が、また課題のスク립ト知識得点と課題のストーリーナラティブ得点の間には弱い偏相関があることが示された。また、課題の文復唱（課題数）得点は、年齢の影響を取り除いても課題の質問応答状況における語り、課題のスク립ト知識得点、課題のストーリーナラティブ得点との間に弱い偏相関がみられた。

コミュニケーションスキルと言語検査で評価されるスキルとの関係

コミュニケーション能力の発達を評価するために作成した各課題の得点と各言語検査の得点間の相関について検討した。ほとんどの課題得点と言語検査の得点との間に弱～中程度の相関がみられた。年齢との相関もあるため、年齢を統制した偏相関係数を算出した結果、課題のスク립ト知識得点はPVT-Rの修正得点との間に弱い偏相関がみられた。また、課題の質問応答状況における語りと課題の選択理由の説明得点は、KABC-の表現語彙粗点との間に弱～中程度の偏相関があった。また、課題の選択理由の説明得点は、KABC-のなぞなぞの粗点とも弱い偏相関がみられた。

(3) 総括

幼児を対象としたこれまでの研究の結果、コミュニケーション能力を評価するために作成した課題について一定の妥当性が示され、課題から抽出された発達評価指標による得点は、既存の語彙などの言語検査の結果と弱い関係性はあるが、質的に異なる言語能力を評価していることが示された。しかし、語彙や統語などの言語の基礎知識以上に能力の個人差が大きく、標準的な発達基準値の確定には、さらに多くのデータを集積する必要があると考えられた。また、評価法として確立させるには、発達の方向性や談話内容の適切さの判断がより明瞭な課題に絞って、研究を進めることも検討課題として残された。

さらに研究を進め、幼児期後期のコミュニケーション能力の発達プロセスを明らかにし、評価法を確立していきたい。

<引用文献>

秦野悦子、瀬戸淳子、野村直子、大澤絢乃、鈴木普子、隠村美子、首都圏 227 保育所における特別ニーズ保育児の出現数：保育者がとらえた知的遅れのない保育困難幼児の特徴(4)、日本発達心理学会第 21 回大会発表論文集、2010、288

瀬戸淳子、秦野悦子、隠村美子、野村直子、大澤絢乃、鈴木普子、保育者が最も気になる特別ニーズ保育児の行動：保育者がとらえた知的遅れのない保育困難幼児の特徴(5)、日本発達心理学会第 21 回大会発表論文集、2010、289

瀬戸淳子、秦野悦子、幼児期のコミュニケーション能力の評価指標の作成と言語支援、平成 23～26 年度科学研究費助成事業研究成果報告書、2015

5. 主な発表論文等

[学会発表](計 9 件)

瀬戸 淳子、秦野 悦子、質問応答状況における 4～6 歳児の日常経験の説明 ナラティブ発達評価指標の作成に向けての基礎研究、日本発達心理学会第 30 回大会論文集、2019、310

瀬戸 淳子、秦野 悦子、4～6 歳児の文復唱の発達と言語知識との関係 - ナラティブ発達評価指標の作成に向けての基礎研究 -、日本教育心理学会第 60 回総会発表論文集、2018、492

瀬戸 淳子、秦野 悦子、「どれがいい?」課題における 4～6 歳児の選択理由の説明 ナラティブ発達評価指標の作成に向けての基礎研究、日本発達心理学会第 29 回大会論文集、2018、604

瀬戸 淳子、秦野 悦子、4～6 歳児のストーリーナラティブの評価指標の検討(2) - ナラティブ発達評価指標の作成に向けての基礎研究 -、日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集、2017、189

瀬戸 淳子、秦野 悦子、「どんな順番?」課題における 4～6 歳児のスク립ト知識の発達過程 - ナラティブ発達評価指標の作成に向けての基礎研究 -、日本発達心理学会第 28 回大会論文集、2017、157

瀬戸 淳子、秦野 悦子、4～6 歳児のストーリーナラティブの評価指標の検討 - ナラティブ発達評価指標の作成に向けての基礎研究 -、日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集、2016、149

瀬戸 淳子、秦野 悦子、4～6 歳児のストーリーナラティブの発達と言語知識との関係 ナラティブ発達評価指標の作成に向けての基礎研究(1)、日本発達心理学会第 27 回大会発表論文集、2016、272

秦野 悦子、瀬戸 淳子、4～6 歳児の絵の叙述の発達 ナラティブ発達評価指標の作成に向けての基礎研究(2)、日本発達心理学会第 27 回大会発表論文集、2016、287

瀬戸 淳子、秦野 悦子、4～6 歳児のパーソナルナラティブの発達過程 - ナラティブ発達評価指標の作成に向けての基礎研究 -、日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集、2015、702

[その他]

瀬戸 淳子、秦野 悦子。(2019) . 幼児期のコミュニケーション能力発達評価法の作成と実用化に向けた研究、平成 27～30 年度科学研究費助成事業研究成果報告書(冊子)、2019、1-130

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：秦野 悦子

ローマ字氏名：(HATANO,etsuko)

所属研究機関名：白百合女子大学

部局名：人間総合学部

職名：教授

研究者番号（8桁）：50114921

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。